

経済・金融 フラッシュ

鉱工業生産 09年5月 ～5 四半期ぶりの増産が確実に

経済調査部門 主任研究員 齋藤 太郎

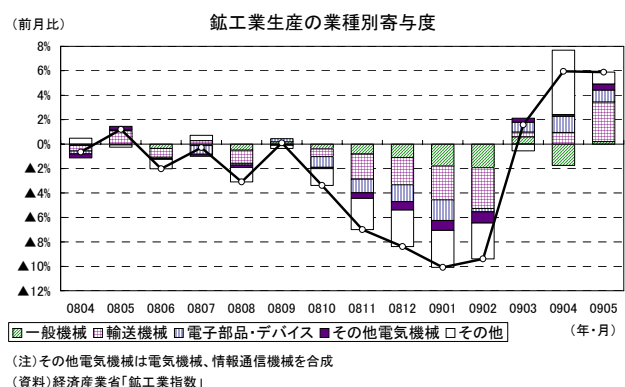
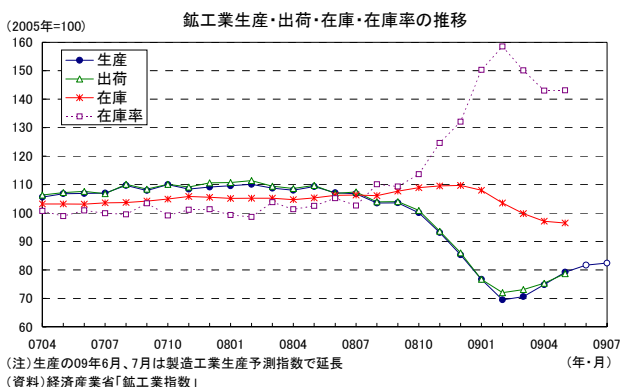
TEL:03-3512-1836 E-mail: tsaito@nli-research.co.jp

1. 輸送機械が前月比 24.8%の大幅増産

経済産業省が6月29日に公表した鉱工業指数によると、5月の鉱工業生産指数は前月比5.9%と3ヵ月連続の上昇となった。4月（同5.9%）に続き高い伸びとなったが、事前の市場予想（ロイター集計：前月比7.0%、当社予想は同7.3%）は下回った。出荷指数は前月比4.5%と3ヵ月連続の上昇、在庫指数は前月比▲0.6%と5ヵ月連続の低下となった。在庫率指数は前月比0.1%と小幅ながら3ヵ月ぶりに上昇した。

5月の生産を業種別に見ると、輸出の下げ止まり、環境対応車の購入促進策（減税+補助金）による国内販売の持ち直しを受け、輸送機械が前月比24.8%の大幅上昇となったほか、在庫調整の進展が続く電子部品・デバイスが前月比10.5%と3ヵ月連続で二桁の伸びとなった。一方、設備投資の急速な落ち込みを反映し4月に前月比▲15.0%と急減した一般機械は、同2.3%と2ヵ月ぶりに上昇したが、前年比では4月に続き50%を超える減少（4月：前年比▲50.0%→5月：同▲50.1%）となっており、依然低調な動きが続いている。

速報段階で公表される16業種中、パルプ・紙・紙加工品、繊維を除く14業種が前月比で上昇となり、増産の動きは裾野の広がりを見せ始めている。



財別の出荷動向を見ると、設備投資の一致指標である資本財出荷（除く輸送機械）は1-3月期に前期比▲19.2%と急速に落ち込んだ後、4月が前月比▲15.7%、5月が同▲2.5%となった。4、5月の平均は1-3月期よりも▲17.1%も低い水準となっている。一方、消費財出荷指数は、1-3月期の前期比▲20.4%の後、4月が前月比5.5%、5月が同8.8%となり、4、5月の平均は1-3月期より

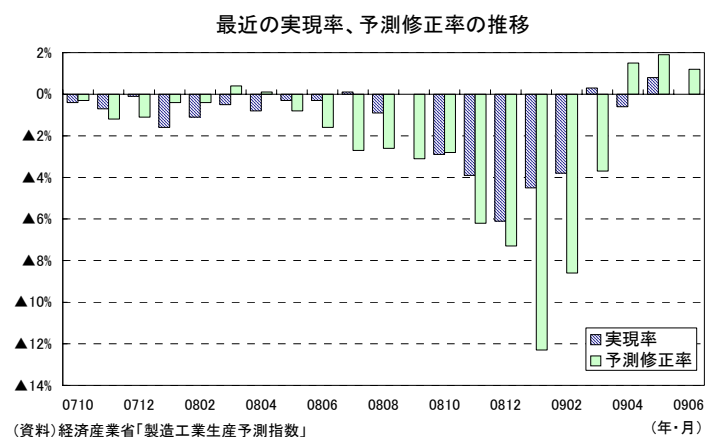
も 8.2%高い水準となっている。

1-3 月期の GDP 統計では、民間消費が前期比▲1.1%、設備投資が前期比▲8.9%とともに大きく落ち込んだ。4-6 月期は、設備投資は引き続き減少するものの、民間消費は定額給付金の効果などもあり、3 四半期ぶりに増加すると予想している。

2. 4-6 月期は 5 四半期ぶりの増産が確実、7-9 月期も増産へ

製造工業生産予測指数は、6 月が前月比 3.1%、7 月が同 0.9%となった。生産計画の修正状況を示す実現率（5 月）、予測修正率（6 月）はそれぞれ+0.8%、+1.2%となった。予測修正率は 3 カ月連続でプラスとなっており、企業の生産計画が上方修正される傾向が次第に明確となりつつある。

業種別には、輸送機械は 5 月に前月比 24.8%の大幅増産となった後、6 月が同 0.9%、7 月が同 5.9%と引き続き増産が計画されている。一方、低迷が続いている一般機械は 6 月には前月比 9.8%と増産が計画されているが、7 月には同▲6.6%と再び減産計画となっている。企業収益の悪化、稼働率の急低下を背景とした設備投資の低迷は長期化する可能性が高いため、一般機械の生産が回復に転じるまでには時間を要するだろう。



なお、鉱工業生産の水準は昨年秋以降の大幅減産に伴い、ピーク時から 63%まで落ち込んだが、6 月、7 月の生産計画が実現したとすれば、ピーク時の 75%程度まで戻ることになる。また、減産幅が最も大きかった輸送機械は最悪期の 43%から 7 月には 64%程度まで戻る計画となっている。

5 月の生産指数を 6 月の予測指数で先延ばしすると、4-6 月期の生産指数は前期比 8.6%の上昇と 5 四半期ぶりの上昇となる。1-3 月期の鉱工業生産は前期比▲22.1%と過去最大の落ち込みを記録したが、4-6 月期は一転して過去最高の伸びとなる可能性が出てきた（四半期ベースの過去最高の伸びは 1953 年 4-6 月期の前期比 8.9%）。

また、6 月、7 月の鉱工業生産が予測指数通りの伸びになったと仮定すると、7 月の生産指数は 4-6 月期よりも 4.9%高い水準となる。輸出の持ち直しや生産計画の上方修正の動きを考慮すれば、4-6 月期に続き 7-9 月期も高い伸びとなる公算が大きいだろう。

(お願い) 本誌記載のデータは各種の情報源から入手・加工したものであり、その正確性と安全性を保証するものではありません。また、本誌は情報提供が目的であり、記載の意見や予測は、いかなる契約の締結や解約を勧誘するものではありません。